

登場人物

お力 料理屋「菊の井」の一枚看板。年は随一若けれども客を呼ぶに妙あり。少し器量の自慢かと思えば、小面が憎くいと蔭口いう朋輩（仲間）もある。つきあってはことのほかやさしいところがあつて、女ながらも離れともない心持がする。面差しがどことなく冴へて見えるは、あの子の本性が現われるのであろう。

お高 二十の上を七つか十か。引き眉毛に作り生え際、白粉べつたりとつけて、唇は人喰う犬のごとく。かくては紅も嫌らしきものなり。

結城朝之助

自ら道楽ものとは名のる。実体は無職業妻子なし。遊ぶに屈強なる年頃。

お初 源七の女房。二十八か九。貧にやつれ七つも年に見える。お齒黒はまだらに生へ、次第の眉毛みるかげもなく、洗いざらしの浴衣を前と後を切りかへて膝のあたりは目立ぬように小針のつぎ当て、狭帯きりと締めて蟬表の内職。（蟬表＝下駄の畳表）

源七 町内で少しは巾もあつた布団屋。お力の久しい馴染みだった。今は見るかげもない貧乏暮らし。八百屋の裏の小さな長屋に、まい／＼つぶろの様に暮らしている。

太吉郎 四～五歳 お初と源七の息子。

第一場 お料理「菊の井」の場 一

店は二間間口の二階作り。軒には御神灯さげて盛り塩景気よく、空壇かなにか知らず、「銘酒」あまた棚の上にならべて、帳場めきたるところも見ゆ。

お力 おい木村さん信さん、寄っておいでよ。お寄りといつたら寄ってもよいではないか。又素通りで二葉へ行く気だろう。押かけていって引ずって来るからそう思いな。

源七 あとでな。銭湯だ。銭湯。

お力 ほんとに銭湯なら帰りにきつとよっておくれよ。嘘つきだからなにを言うか知れやしない。

あとにもないもんだ。来る気もないくせに、本当に女房もちになつては仕方がないね。

高ちゃん大分ご述懐だね。なにもそんなに案じるにもおよぶまい。やけぼつくとなんとやら、又よりのもどることもあるよ。心配しないで、まじないでもして待つがいいさ。

お高 力ちゃんどちがって、私には腕がないからね。一人でも逃しては残念さ。わたしのような運の悪い者には、まじないもなにも効きはしない。今夜も又、木戸番かなんたらごとだ。面白くもない。

力ちゃん、さっきの手紙お出しか。

お力 はあ。どうで来るのではないけれど、あれもお愛想さ。

お高 大抵におしよ。巻紙二尋も書いて二枚切手の大封じが、お愛想で出来るものかな。そして、あの人は赤坂以来からの馴染みではないか。少しやそつとのいそぎがあろうとも、縁切れになつてたまるものか。お前の出かた一つでどうでもなるに、ちつとは精を出して、取止めるように心がけたらよかる。あんまり冥利がよくあるまい。

お力 ご親切にありがとうございます。ご意見は承りおまして。私はどうもあんな奴は虫が好かないから、なき縁とあきらめてください。

お高 あきれたものなのう。お前なぞは、その我まが通るから豪勢さ。この身になつては仕方がない。

力ちゃん、お前の事だから何があつたからとて、気にしてもいまいけれど、私は身につまされて。源さんのことが思われる。それは今の身分に落ぶれては、根っからよいお客ではないけれども、思い合うたからには仕方がない。年が違いや子があるがさ、ねえ、そうではないか。お内儀さんがあるといつて別られるものかねえ。かまうことはない呼び出しておやり。私のなぞといつたら、野郎が根から心がわりがして、顔を見てさえ逃げ出すのだから仕方がない。どうで諦めもので別口へかゝるのだが、お前のはそれとは違う。了簡一つでは、今のお内儀さんに三下り半をも遣られるのだけれど、お前は気位が高いから源さんと一緒になろうとは思ひまい。それだもの、なおのこと呼ぶ分に子細があるものか。手紙をお書き。今に三河屋の御用聞きが来るだろうから、あの子僧に使いやさんをさせるがよい。どこの人、お嬢様ではあるまいし、ご遠慮ばかり申してなるものかな。お前は思い切りがよすぎるからいけない。ともかく手紙をやつてごらん。源さんも可哀想だわな。

お力 気をつけておくれ。店先で言われると人聞きが悪いではないか。菊の井のお力は土方の手伝いを情夫に

持つなど、考え違いをされてもならない。それは昔の夢がたりさ。何の今は忘れてしまいで、源とも七とも思い出されぬ。もうその話しはやめ／＼。(お力、新しい客結城を見つける)

あれお客さん、雨が降りますよ。どうでも他へはやりませぬ。こちらに寄って行ってくださいな。

お力 よくいらっしやいました。

結城 年は幾つだ。

お力 さあ、いくつでしょ。

結城 氏族か。

お力 どうでござんしょうか。

結城 華族か。

お力 まあそう思うていて下され。お華族の姫様が手づからのお酌。かたじけなくお受けなされ。

結城 そうとは無作法な。置つぎというがあるものか。それは小笠原か、何流ぞ。

お力 お力流とて、菊の井一家の作法。畳に酒飲まする流儀もあれば、大平の蓋で呷らせる流儀もあり、いやなお人にはお酌をせぬというが、大詰めの極まりでござんす。

結城 履歴を話して聞かせよ。定めてすさまじい物語があるに相違なし。たゞの娘あがりとは思われぬ。どうだ。

お力 ご覧なさりませ。いまだ鬢の間に角も生えませず。そのように甲羅はのせませぬ。ホホホホ。

結城 そうぬえ。

お力 むずかしゅうござんすね。言うたらあなた、びつくりなさりましよ。天下を望む大伴の黒主とは私がこと。ホホホホ。

結城 これはどうもならぬ。そのように茶利ばかり言わで、少し本当のところを聞かしてくれ。いかに朝夕を嘘の中に送るからとて、ちつとは真も交じるはず。良人はあつたか、それとも親故か。

お力 私だとして人間でござんすほどに、少しは心にしみることもあります。親は早くになくなって、今は本当の手と足ばかり、こんな者なれど女房に持とうと言うてくださるものではないけれど、いまだ良人をば持ちませぬ。どうで下品に育ちました身なれば、このようなこととして終るのでござんしよ。

結城 何も下品に育つたからとて、良人の持てぬことはあるまい。ことにお前のような別品さんではあり、一足とびに玉の輿にも乗れそうなもの。それとも左様な奥様扱い虫が好かで、やはり伝法肌の三尺帯が気に入るかな。

お力 どうで、そこらが落でござりましよ。こちらで思うようなは先様が嫌なり。来いと行ってくださるお人の気に入るもなし。浮気のように思召ましようが、其日送りでござんす。

結城 いやそうは言はさぬ。相手のないことはあるまい。いま店先で誰れやらがよろしく言うたと、他の女が言ったではないか。いずれ面白いことがあろうなどと言うに。

お力 あゝ、あなたもいたり詮索なさります。馴れそめはざら一面。手紙のやりとりは、反故の取り替えこ。書けと仰しやれば起請でも誓紙でもお好み次第さし上ましよう。女夫約束などと言っても、こっちで破るよりは、先方様の性根なし。主人もちなら主人がこわく。親もちなら親の言いなり。振り向いて見てくれねばこちらも追いかけて袖を捉らえるに及ばず。それならよせとて、(間) それ限りになります。相手はいくらもあれども、一生を頼む人がないのでござんす。

もうこのような話しはよしにして、陽気にお遊びなさりまし。私はなにも沈んだことは大嫌い。騒いでさわいで、騒ぎぬこうと思ひます。(手を叩く)

お高 力ちゃん大分おしめやかだね。

結城 おい、この娘の可愛い人はなんと言う名だ。

お高 はあ、私はまだお名前を承りませんでした。

結城 嘘を言うと盆がくるに、閻魔様へお参りができまいぞ。ハハハ。

お高 それだとしてあなた、今日お目にかゝったばかりでは御座りませぬか。今改めて伺ひにでようとしていました。

結城 それはなんのことだ。

お高 あなたのお名を。

結城 馬鹿／＼お力が怒るぞ。

お高 旦那のお商売を当てて見ましようか。

結城 なにぶん願います。(手のひらを出す)

お高 いえ、それには及びませぬ。人相で見まする。

結城 よせ／＼、じつと眺められて棚おろしでも始まつてはたまらぬ。こう見えても僕は公務員だ。

お高 嘘を仰しやれ、日曜のほかに遊んであるく公務員がありますものか。
力ちやん、まあ何でいらっしやろう。褒美よ。(結城の懐中から紙入れを出し、座布団の上におく)

お力 (笑ひながら) 高ちゃん失礼をいってはならない。このお方は御大身の御華族様。お忍び歩きの御遊興さ。なんの商売などがおありなさろう、そんなのではない。あなた、これをばお預けなされまし、みなの方に祝義でも遣わしましょう。(答へも聞かず、紙入れの中味をずん／＼と引出す)

結城 (柱に寄かゝつて眺めながら小言もいはず) 諸事おまかせ申す。

お高 力ちやん、大抵におしよ。

お力 なに、いいのさ。これはお前に、これは姉さんに。大きいので帳場の払いを取って。残りはみんなにやつてもいい。

お高 お礼を申して、頂いておいで。旦那よろしいのでございますか。ありがとうございます。

結城 十九にしては更けてるね。

お高 人の悪いことを仰しやる。

お力 (起つて障子を開ける。手摺りに寄つて頭痛をたたく)

結城 お前は どうする。金は欲しくないか。

お力 私は別にほしいものがござんした。これさへ頂けば何より。
(帯の間から客の名刺をとり出して頂くまねをする)

結城 いつの間に引出した。お取り替えには写真をくれ。

お力 この次の土曜日に来て下さればご一緒に写しましょう。(帰るかゝる客を左のみは止めもせず、うしろに回って羽織を着せる) 今日失礼をいたしました。またのお出を待ます。

結城 おい、程のいいことを言うまいぞ。空誓文は御免だ。

お力 嘘か誠か九十九夜の辛棒をなさりませ。菊の井のお力は鑄型に入つた女でござんせぬ。なりの変わることもあります。

お高 頼んでおいた車が來ました。唯今はありがとうございます。

お力 ありがとうございます。

結城 (下手へ退場する)

お高 力ちやん、大明神様。ありがとう。力ちやんお楽しみであろうね、結城様の男振はよし、気前はよし。今にあの方は出世をなさるに相違ない。その時はお前のことを奥様とでも言うのであらうに。今つから少し気をつけて。人柄が悪いやね。源さんが聞たらどうだろう。気違ひになるかも知れない。

お力 あゝ、結城さんが馬車にのつて來る時、都合が悪いから、道普請からしてもらいたいね。こんな溝板のがたつく様な店先へ、それこそ人柄が悪くて。横づけにもされないではないか。お前方も、もう少しお行義をなしてお、お給仕に出られるよう心がけておくれ。

お高 エ、憎くらしい。その物言いを少しな小さずば、奥様らしく聞こえまい。結城さんが來たら思うさま言うて、小言をいはせて見せよう。

第二場 同じお料理「菊の井」 二

登場人物

お力

お高

結城朝の助

お高 このようなことを申しています。どうしても私共の手にのらぬ「やんちゃ」なれば、あなたから叱つて下され。第一湯呑みで呑むは毒でござりましよ。(下手へ退場)

結城 お力、酒だけは少しひかえろ。

お力 あゝ、あなたのようにもない。お力が無理にも商売してられるはお酒の力と思し召さぬか。私に酒っ気が離れたら、座敷は三味堂のようになりましょう。ちつと察して下され。

結城 成程／＼(間)。どうかしたか。又頭痛でもはじまつたか。

お力 なに頭痛も何もませぬけれど、しきりに持病が起つたのです。

結城 お前の持病も癩癩か。

織機 いゝえ。

結城 血の道か。

お力 いゝえ。
結城 それでは何だ。
お力 どうも言うことはできません。
結城 でも他の人ではなし、僕ではないか。どんな事でも言うてよさそうなもの。まあ、何の病氣だ。
お力 病気ではござんせぬ。唯こんな風になつて、このようなことを思うのです。
結城 困つた人だな。いろ／＼秘密があると見える。お父とっさんはと聞けば言われませぬと言う。お母つかさんはと問へばそれも同じく。これまでの履歴はと言うに、あなたには言われぬという。まあ嘘でもいいさ。よしんば作り言にしろ、こういう身の不幸せだとか、大抵の女は言わねばならぬ。しかも一度や二度会うのではなし、そのくらいのことを発表しても、子細はなからう。
お高 (再び静かに登場)
結城 よし、口に出して言はなからうとも、お前に思うことがあるくらい、めくら按摩あんまに探ぐらせても知れたこと。聞かずとも知っているが、それを聞くのだ。どっち道同じことだから持病と言うのを先きに聞きたい。
お力 およしなさいまし、お聞きになつても詰らぬこととござんす。
お高 (お力に耳打ち) ともかくも下までおいでよ。
お力 いや行きたくないからよしておくれ。今夜はお客が大変に酔いましたから、お目にかゝつたとてお話しもできませんと断つておくれ。あゝ、困つた人だね。
お高 お前それでもいいのかえ。
お力 はあ、いいのさ。(膝の上で撥をもてあそぶ)
お高 (不思議そうに退場する)
結城 (笑いながら) 御遠慮にはおよばない。会つて来たらよからう。なにもそんなに体裁にはおよばぬではないか。可愛い人を素戻しもひどからう。追いかけて会うがよい。なんならここへでも呼びたまえ。片隅へ寄つて話ししゃべの邪魔はすまいから。
お力 串談(冗談)はぬきにして結城さん。あなたに隠したとて仕方がないから申しますが、町内で少しは巾もあつた布団屋の源七という人、久しい馴染なじみでござんした。けれど今は見るかげもなく貧乏して、八百屋の裏の小さな長屋に、まい／＼つぶろのようになっています。女房もあり子供もあり、私がよな者に会いに来る年ではなけれど、縁があるか、いまだに折ふし何の彼のといつて、今も下座敷しもざしきへ来たのでござんしょう。なにも今さら突出すと言うわけではないけれど、会つては色々面倒なこともあり、寄らず障らず帰した方が好いのでござんす。恨まれるは覚悟の前、鬼だとも蛇だとも思うがようござります。(少し延びあがりて表を見おろす) あゝ、もう帰つたと見えます。
結城 持病と言うのはそれか。
お力 まあそのようなところでござんしょう。お医者様でも草津の湯でも。
結城 御本尊を拜みたいな。役者でいつたら誰れのところだ。
お力 見たらきつと驚きでござりましょう。色の黒い背の高い不動さまの名代。
結城 では心意氣か。
お力 こん店しんじやうで身上はたくほどの人。人の好いばかり、取得とりえとしては皆無でござんす。面白くも可笑しくも何ともない人。
結城 それにお前は どうしてぼせた。これは聞きどころ。
お力 大方のぼせ性なのでござんしょう。あなたのことをも、この頃は夢に見ない夜はござんせん。奥様のお出来なされたところを見たり、ぴつたりとお出でのとまつたところを見たり、まだ／＼一層もつと悲しい夢を見て、枕紙がびつしよりになつたこともござんす。高ちゃんなどは、夜に寝るからとでも、枕を取るよりはやくいひきの声たかく、好い心持らしいが、どんなにうらやましゅうござんしょう。私はどんな疲れた時でも床へ這入ると目が冴へて、それはそれは、色々のことを思います。あなたは私に思うことがあるだろうと察していただくからうれしいけれど、よもや私が何を思うか、それこそお分りになりますまい。考えたとて仕方がないゆえ、人前ばかりの大陽気、菊の井のお力は行き抜けの締まりなした。苦勞ということは知るまいと言うお客様もござります。ほんに因果とでもいうものか。わが身くらい悲しいものはあるまいと思います。
結城 珍らしいこと、陰気のはなしを聞かせられる。慰めたいにも本末を知らぬから方がつかぬ。夢に見てくれるほど実があらば、奥様にしてくれろくらい言いそうなものなのに、根つからお声がかりもないは、どう言うものだ。古風に出るが袖ふり合うもさ、こんな商売を嫌だと思つたら遠慮なく、打明けばなしをなさるがいい。僕は又、お前のよな気では、いつそ気楽だとかいう考えで浮いてわたることかと思つたに。それでは何か、理屈があつて止むを得ずという次第か。苦しからずは承りたいものだ。

お力 あなたには聞いて頂こうと、この間から思いました。だけれども今夜はいけませぬ。なぜ／＼、なぜでもいけませぬ。私がわがまゝゆえ、申すまいと思つた時はどうしても嫌やでござんす。(経って縁側へ出る) 結城さん。まあここへお座りなさい。あの水菓子屋で桃を買う子がござんしよ。可愛らしき四つばかりの。あれがさっきの人のでござんす。あの小さな子、心にもよく／＼憎くいと思うと見えて、私のことをば鬼々と言います。まあ、そのような悪者に見えるか。(空を見あげてホツと息をつく)

第三場 「源七の家」の場 一

はずれの八百屋と髪結床が、庇合ひのような細い露路。窮屈さに、足もとは所々に溝板の落し穴危うげな、両側に立てたる棟割り長屋。突き当たりの芥溜め脇に、九尺二間の上り框朽ちて、雨戸はいつも不用心のたてつけ。さすがに一方口にはあらで、山の手の仕合は、三尺ばかりの椽の先に草ぼう／＼の空地の端を、少し圍つて青紫蘇、えぞ菊、隠元豆の蔓などを竹のあら垣に搦ませたるが源七が家。(庇合ひ=ひさがし向き合)

登場人物

太吉郎

お初

源七

太吉 (がた／＼と溝板の音させて) 母さん今戻つた。お父さんも連れて来たよ。

お初 大層おそいではないか。お寺の山へでも行はしないかと、どの位案じたらう。早くお入り。

源七 (元氣なくぬつと上る)

お初 おや、お前さんお帰りか。今日はどんなに暑かつたでしょう。定めて帰りが早かろうと思つて。行水を沸かしておました。ざつと汗を流したらどうでござんす。太吉もお湯に入りな。

太吉 あい。

お初 おまちおまち。今加減を見てやる。(流しもとに盥をすえて釜の湯を汲出し、かき回して手拭を入れる)

さあ、お前さんこの子も入れてやつて下され。何をぐたりとなつておいでなさる。

暑さにも障りはしませぬか。そうでなければ一杯あびて、さつぱりになつて御膳あがれ。太吉が待つていますから。

源七 おゝ、そうだ。(帯をといて流しへ下りれる)

太吉 父ちゃん背中を洗つておくれ。

お初 お前さん蚊が喰いますから早々とお上りなされ。

源七 おいおい。(上にあがつて洗い晒せし、さば／＼の裕衣に着かえる)

お初 お前の好きな冷奴にしました。

太吉 (台より飯櫃取おろして) よつちよい よつちよい。

源七 坊主はわれが傍に来い。(舌に覚えのなくて咽の穴腫れたるごとく) もう止めにする。

お初 そのようなことがありますものか。力業をする人が三膳のご飯の食べられぬと言ふことはなし。気合いでも悪うござんすか。それとも酷く疲れてか。

源七 いやどこもなんともないようなれど、ただたべる気にならぬ。

お初 お前さん、又例のが起りましたらう。そうれ、菊の井の鉢着は甘くもありましたらうけれど、今の身分で思ひ出したところが何となります。先は売り物買物。お金さえできたら昔のように可愛がつてもくれましよう。表を通つて見ても知れる、白粉つけて美しい着物きて、迷つて来る人を誰れかれなしに丸めるがあの人達が商売、あゝおれが貧乏になつたから構いつけてくれぬなと思えば、なんのこともなく済ましよう。

恨みにも思つただけがお前さんが未練でござんす。裏町の酒屋の若い者知つてお出なさろう、二葉屋の角に心から落込んで、かけ先を残らず使い込み、それを埋めようとて雷神虎が盆筵の端についたが身の詰り、次第に悪いことが染みて、終いには土蔵やぶりまでしたそう。いま男は監獄入りして、もつそう飯(盛り切り飯)食べていようけれど、相手のお角は平気なもの。おもしろ可笑しく世を渡るに咎める人なく美事繁昌しています。あれを思つて商売人の一徳。だまされたはこの方の罪。考えたとて始まることではござんせん。それよりは氣を取直して稼業に精を出して、少しの元手も拵えるように心がけて下され。

お前に弱られては私もこの子もどうすることもならで、それこそ路頭に迷わねばなりませぬ。男らしく思い切る時、あきらめてお金さえできようなら、お力はおろか小紫でも揚巻でも、別荘こしらへて圍うたらようござりましよう。もうそんな考えごとは止めにして、機嫌よく御膳あがつて下され。

源七 我れながら、未練ものめと叱りくれるな。なんのこの身になつて今更なにを思ふものか。飯が食べぬとて

も、それは身体からだの加減かげんであろう。何も格別案かくべつあんじてくれるには及ばぬゆえ、小僧おぼも十分こぞう じゆうぶんにやつてくれ。

第四場 同じお料理「菊の井」 三

お力のアリア

お力 誰れ白鬼むげんとは名をつけし。無間地獄いずこのそこはかたなく景色づくり。何処いずこにからくりのあるとも見えねど、逆さかさ落して、血の池、借金の針の山に追いのぼすも手の物と聞くに、「寄つてお出でよ」と甘へる声も、蛇喰へびくう雉子きしと恐ろしくなりぬ。菊の井のお力とても悪魔あくまの生れ替わりにはあるまじ。人の涙なみだは百年も我慢がまんして、われゆえ死ぬる人のありとも、御愁ごしゆうしゆう傷さまと脇わきを向くつらさ。他處目よそめも養やしないつらめ、さりとも折よふしは悲しきこと、恐ろしきことが胸むねにたまつて、泣くにも人目を恥れば、二階座敷の床の間に身を投げ伏して、忍しのび音の憂うれき涙なみだ。これをば友にも洩いらさじと包むに、根性のしつかりした気けのつよい子という者はあれど、障さわれば絶ゆる蜘蛛の糸の、はかないところを知る人はなかりき。

お高 (ステージ裏から)「力ちゃんはどうした。心意氣を聞かせないか」。

お力 あゝ、私は一寸失礼をします。御免なさいよ。

お高 (ステージ裏にて)どこへゆく、逃げてはならない。

お力 高さん少し頼むよ、直き帰るから。

お力のアリア

つまらぬ、くだらぬ、面白くない、情いない、悲しい。心細い中に何時まで私は止められているのかしら。

これが一生か。一生がこれか。あゝ、嫌だ嫌だ嫌だ。やはり私も丸木橋まわきばしをば渡わたらざばなるまい。渡るにや怕しかたし、渡らねば仕方がない。父さんも踏ふかえして落ちてお仕舞まなされ、祖父さんも同じことであつたという。

いくどで幾代もの恨せみを背負あうて出た私なれば、なるたけのことはしなければ、死んでも死なれぬのであろう。情いないとても、誰れも哀れあれと思うてくれる人はあるまじく、悲しいと言いえば商売まがらを嫌きらうかと、ひと口に言いわてしまう。えゝ、どうなりとも勝手かたになれ、勝手かたになれ。

私の身の行き方は分らぬなれば、わからぬなりに菊の井のお力を通してゆこう。

人情にんじやうしらず義理ぎりしらずか、そのようなことも思うまい。思うたとどうなるものぞ。このような身で、このような業体ごうたいで、このような宿世しゆくせで、どうしたからとて、人並みではないに相違さなければ、人並ひとらのことを考えて苦勞くるわうするだけ間違いである。

あゝ、陰気いんきらしい。なんだとてこのような所に立つているのか。なにしにこのようなところへ出あて来たのか。馬鹿あらしい気違あいじみた我が身みながら分らぬ。もう／＼帰かりましょう。ただ、われのみは荒野あの原のの冬枯ふゆれを行いくように、心こに止とまるものもなく、気きにかゝる景色けいしきにも覺あえぬは、われながらひとりのぼせて、人心ひとこころのないのにと、覺おぼ束つかなく、気が狂くるいはせぬか。

結城 (肩を打つ) お力、どこへ行く。

第五場 同じお料理「菊の井」 四

結城朝之助

お力

お高 おや、お帰り。結城さんとお二階かえ。

お力 今夜も頭痛こがするので、御酒ごしゆの相手あいはできませぬ。大勢おほしの中ちゆうにいれば御酒ごしゆの香かに酔ようて夢中むちゆうになるも知れませぬから、少し休やすんで、その後は知らず、今は御免ごめんなさりませ。

結城 それでよいのか。怒いらりはしないか。やかましくなれば面倒めんどうであろう。

お力 どのお店も、お力の白瓜びやくかが、どんなことを仕出しだしましょう。怒いらるなら怒いられでござんす。結城さん、今夜は私わたしに少し面白くない事ことがあつて、気きが變かわっていまするほどに、その氣きで付つき合あっていただきませ。お酒おしゆを思おもい切きつて呑のみまするから止とめてくださるな。酔ようたらば介抱かいぼうしていただきませ。

結城 君きみが酔よつたをいまだに見みたことがない。氣きが晴はれるほど呑のむはよいが、又頭痛こがはじまりはせぬか。なにがそのような逆鱗ぎやくりんにふれたことがある。僕われらに言いつては悪いことか。

お力 いえ、あなたには聞いて頂たまきたいのでござんす。酔ようと申ましますから驚おどいてはいけませぬ。

お力のアリア

(嫣然えんぜんにつこりとして) 大湯呑おほゆぐを取とってくださいな。あなたの今宵こんしゆうは、なみならず思おもわれまする。

(一息ひといきに飲のみほす) 落おついてもものを言いう重おもやかなる口くちぶり、威い厳げんの備ひわれるを嬉うれしく、今更いまさらのように眺ながら

れまする。

結城 何をうつとりしている。

お力 あなたのお顔を見ているのさ。

結城 この奴めが。

お力 おゝ怖いお方。(笑っている)

結城 今夜は様子が唯でない。聞いたら怒るか知らぬが、なにか事件があつたか。

お力 なにしに、降つて沸いたこともなければ、人とのいざこざなどは、よしあつたにしろ、それは常のこと。

気にもかゝらねば、なにしにものを思いましよう。

お力のアリア

私の時より気まぐれを起すは、人のするのではなくて、みな心がらのあさましいわけがござんす。私はこのような賤しい身の上、あなたは立派なお方様。思うことはうらはらに、お聞きになつても汲んでくださるかくださらぬか。今夜は残らず言います。まあ何から申そう、胸がもめて口が利かれぬ。

(又もや大湯呑に呑む事さかなり)。なにより先に、私が身の自墮落を承知して下され。悪業に染まらぬ女子があらば、繁昌どころか見に来る人もあるまじ。

あなたは別物、これでも折ふしは、世間さま並のことを思うて、恥かしいこと、つらい事情、ないこととも思われるも、いつそ九尺二間でも極まつた良人と言うに添うて、身を固めようと思ふこともござんす。けれど、それが私はできません。数の中には真に受けて、このようなやくぎを女房にと申す方もある。

持たれたら嬉しいか、添うたら本望か、それが私は分りませぬ。

そも／＼のはじめから、私はあなたが好きで好きで、一日お目にかゝらねば恋しいほどなれど、奥様にと申す下されたら、どうでござんしよか。

私の父というは三つの歳に椽から落て片足あやしき風になりたれば、人中に立まじるも嫌やとて、居職に飾の金物をこしらへましたれど、気位たかくて人愛のなければ、鼻負にしてくれる人もなく、あゝ私が覚えて七つの年の冬でござんした。寒中親子三人ながら古裕衣で、父は寒いも知らぬか柱に寄つて細工物に工夫をこらすに、母は欠けた一つ竈に破れ鍋かけて私にさる物を買に行けという。

味噌こし下げて端たのお錢を手握つて、米屋の門までは嬉し駆けつけたれど、帰りには寒さの身にしみて、手も足も龜かみたれば、五六軒隔てし溝板の上の氷にすべり、足溜りなく轉けるはずみに、手の物を取落して、一枚はずれし溝板のひまより、ざら／＼とこぼれ入れば、下は行水きたなき溝泥。

話しは誠の百分一、私は其頃から気が狂つたのでござんす。帰りの遅きを母の案じて尋ねに来てくれたをば時機に、家へは戻つたれど、母ももの言わず、父親も無言に、誰れ一人私をば叱るものもなく、家の内森として折々溜息の声のもれるに、私は身を切られるより情なく、今日は一日断食にしよう父のひとこと言ひ出すまでは忍んで息をつくようござんした。

私はそのような貧乏人の娘。気違ひは親ゆづりで、折ふし起るのでござります。

さぞあなた、御迷惑で御座んしてしよ。もう話しはやめます。御機嫌に障つたらばゆるして下され、誰れか呼んで陽気にしましょうか。

結城 いや遠慮は無沙汰。それで親は早くに亡くなつてか。

お力 はあ、母さんが肺結核というを煩つて死なりましたから、一週忌のこぬほどに、跡を追いました。今おりまして未だ五十、親なれば褒めるではないけれど、細工は誠に名人と言うてもよい人でござんした。

結城 お前は出世を望むな。

お力 えつ。私等が身にて望んだところが味噌こしが落。なんの玉の輿までは思いがけませぬ。嘘をいうは、人による始めから。何も見知つているに隠すは野暮の沙汰ではないか。思い切つてやれ／＼とあるに、あれそのようなけしかけ言葉はよして下され。どうでこのような身でござんするに。

お高 今宵もいたく更けたれば、お力はどうでも泊らるといいます。いつしか下駄をも藏かくさせれば、足を取られて、幽霊ならぬ身の、戸のすき間より出ることもなるまじとて、今宵はここに泊ることとなりぬ。

第六場 「源七の家」の場 二

登場人物

お初

源七

太吉郎

お初 お前さん、それではならぬぞへ。

源七 エい、なにも言うな黙^{だまつ}つていろ。

お初 黙^{だまつ}つては、この日が過されませぬ。身体がわるくば薬も呑むがよし、お医者にかゝるも仕方がなければ、お前の病^{やまい}はそれではなしに、気さへ持直せばどこに悪いところがあるろう。少しは正気になつて勉強をして下され。

源七 いつでも同じことは、耳にたこができて気の薬にはならぬ。酒でも買って来てくれ。気まぎれに呑んで見よう。

お初 お前さん、そのお酒が買えるほどなら、嫌^{いや}とお言いなさを無理に、仕事に出て下されとは頼みませぬ。私が内職とて朝から夜にかけて十五銭^{せん}が関の山、親子三人口、おも湯も満足には呑まれぬ。中で酒を買えとは、よくよくお前無茶助になりなさんした。お盆だというに、昨日も小僧には白玉一つこしらへても食べさせず、お精霊さまのお店かざりも拵^{しら}えくれねば、お灯明一つでご先祖様へお詫びを申しているも、誰れが仕業^{あほう}だと思いなさる。

お前が阿房^{あほう}をつくして、お力づらめに釣られたから起つたこと。いうては悪いけれど、お前は親不孝子不孝。少しはあの子の行末^{のん}をも思うて真人間になつて下され。酒を呑で気を晴らすは一時、真から改心してくださらねば、心元^{こころもと}なく思われます。

源七 (吐息折々に太く、身動きもせず仰向たる)

お初 その身になつてもお力がことの忘れられぬか。十年つれそうて、子供まで儲けしわれに、心かぎりの苦勞をさせて、子にはぼろを下げさせ、家としては二畳一間のこのような犬小屋。世間一帯から馬鹿にされて、別ものにされて、よしや春秋の彼岸が来ればとて、隣近所に牡丹もち團子と配り歩^{もう}く中を、源七が家へは遣らぬがよい。返礼が気の毒^{むづかしい}なとて、親切かは知らねど、十軒長屋の一軒は除けもの。男は外出がちなればいさゝか心にかかるまじけれど、女心には遣る瀬なきほど切なく悲しく、おのづと肩身せばまりて朝夕の挨拶も人の目色を見るようなる情なき思ひもするを。それをば思わで、我が情婦の上ばかりを思いつづけ、無情人の心の底^{もら}が、それほどまでに恋しいか。

太吉 母さん母さんこれを貰^{もら}って来た。

お初 おやこのような好いお菓子を誰れにもらって来た。よくお礼を言つたか。

太吉 あゝ、よくお辞儀^{すふと}をしてもらって来た。これは菊の井の鬼姉^{おにねえ}さんがくれたの。

お初 (顔色かへて) 凶太い奴めが。これほどの淵^{ぶち}に投げ込んで、いまだいじめ方が足りぬと思うか。現在の子を使いに父さんの心を動か^{うご}かしによこしい。何というてよこした。

太吉 表通りの賑やかなところに遊んでいたら、どこのか伯父さんと一緒に来て、菓子を買つてやるから一緒においでといて、おいらは入らぬと言つたけれど抱いて行つて買ってくれた。食べては悪いかえ。

お初 あゝ、年がゆかぬとて、何たら訳の分らぬ子ぞ。あの姉さんは鬼ではないか。

父さんをなまけものにした鬼ではないか。お前の衣類^{べべ}のなくなったも、お前の家のなくなったも、皆あの鬼めがした仕事。食らいついても飽き足らぬ悪魔に、お菓子を貰つた食べてもよいかと聞くだけが情ない。汚いむさいこのような菓子。家へおくのも腹がたつ。捨ててしまいな、捨てておしまい。お前は惜しくて捨てられないか。馬鹿野郎め。

源七 お初。(声大きく言う)

お初 何か御用かよ。

源七 いい加減に人を馬鹿にしろ。黙^{だまつ}つていればよいことにして、悪口雑言はなんのことだ。知った人なら菓子くらい子供にくれるに不思議もなく、もろうたとて何が悪い。馬鹿野郎呼ばわりは、太吉をかこつて、おれへの当てこすり。子に向つて、父親の讒訴^{ざんそ}をいう女房氣質を誰れが教えた。お力が鬼なら手前は魔王、商売人のだまは知れていれど、妻たる身の不貞腐れを言うて済むと思うか。土方をしょうが車を引こうが、亭主^{めろう}は亭主の権がある。気に入らぬ奴を家にはおかぬ。どこへなりと出てゆけ。出てゆけ、面白くもない女郎め。

お初 それはお前無理だ。邪推^{じゃすい}が過ぐる。なにしにお前に当てけよう。この子が餘り分らぬと、お力の仕方が憎くらしさに、思いあまつて言つたことを、とつこに取つて(真に受けて)出てゆけとまでは憐^{むご}うござんす。家のためを思えばこそ気に入らぬことを言ひもする。家を出るほどなら、このような貧乏世帯の苦勞をば忍んではいませぬ。

源七 貧乏世帯に飽きがきたなら、勝手にどこなり行つてもらおう。手前がいぬからとて乞食^{ねた}にもなるまじく、太吉が手足の延ばされぬことはなし。明けても暮れても、我が店おろしか、お力への妬み。つくづく聞き飽きて、もういやになつた。貴様が出ずば、どちら道同じこと。おしくもない九尺二間。われが小僧を連れて出よう。そうならば十分に我鳴り立る都合もよからう。さあ貴様が行くか、我れが出ようか。

お初 お前はそんなら、本当に私を離縁する心かえ。
源七 知れたことよ。(いつの源七にはあらざりき)。
お初 これは私が悪うござんした。堪忍をしてくだされ。お力が親切で 志してくれたものを、捨ててしまったは重々悪うございませぬ。なるほどお力を鬼というたから、私は魔王でござんしょう。モウ言いませぬ。モウ言いませぬ。決してお力のことにつきて、こん後とやかき言いませぬ。陰の噂しますまいゆえ、離縁だけは堪忍してくだされ。改めて言うまではなけれど、私には親もなし兄弟もなし、差配の伯父さんを仲人なり里なりに立てゝ来た者なれば、離縁されての行き所とはありませぬ。どうぞ堪忍しておいてくだされ。私は憎くかろうと、この子に免じておいて下され。謝ります。
源七 イヤ、どうしてもおかれぬ。
お初 太吉、太吉。(と傍へ呼んで) お前は父さんの傍と母さんと、どちらが好い、言うて見ろ。
太吉 我らはお父さんは嫌い、何にも買つてくれないもの。
お初 そんなら母さんの行く所へどこへも一緒に行く気かえ。
太吉 あゝ行くとも。
お初 お前さんお聞きか。太吉は私につくとおっしゃる。男の子なればお前も欲しかろうけれど、この子はお前の手にはおかれぬ。どこでも私がもらって連れて行きます。ようござんすか、もらいます。
源七 勝手にしろ、子も何も入らぬ。連れて行きたくばどこへでも連れて行け。家も道具も何も入らぬ。どうなりともしろ。
お初 なんの、家も道具もないくせに。勝手にしろもないもの。これから身一つになつて、したいまゝの道楽なり何なり、おつくしなされ。もういくらこの子をほしいと言つても返すことではござんせぬぞ。返しはしませぬぞ。これはこの子の寝間着の 裕、はらがけと三尺だけ貰つて行ます。御酒の上というでもなければ、醒めての思案もありますまいけれど、よく考へて見てくだされ。たとえどのような貧苦の中でも二人双つて育てる子は長者の暮しといひます。別れば片親、何につけても不憫なは、この子とお思いなさらぬか。あゝ、はらわたが腐た人は、子の可愛さも分りはすまい。もうお別れ申します。
源七 早くゆけ／＼。

終幕の Aria

結城 盆提灯のかげ薄淋しき頃、新開の町を出し棺二つあり。一つは駕にて、一つはさし擔ぎにて。駕は菊の井の隠居所より、しのびやかに出ぬ。大路に見る人の、ひそめくを聞けば…。
お高 あの子もとんだ運のわるい話らぬ奴に見入れて、可哀想なことをした。イヤあれは、得心づくだと言います。あの子の夕暮、お寺の山で、二人立ばなしをしていたという確かな証人もござります。女も、のぼせていた男のことなれば、義理にせまつて遣つたのでござろ、というもあり。なんの、あの悪魔が義理を知ろうぞ。風呂屋の歸りに男に逢うたれば、流石に振はなして逃ることもならず、一緒に歩いて話しはしても、いたろうなれど、切られたは後袈裟、頬先のかすり傷、頸筋の突傷など色々あれども、たしかに逃ることを遣られたに相違ない。
結城 引かえて男は美事な切腹。布団屋の時代から、左のみの男と思わなんだが、あれこそは死花。えらそうに見えたという。なににしろ菊の井は大損であろう。あの子には結構な旦那がついたはず。取にがしては残念であろうと、人の愁いを串談に思ふものもあり。諸説みだれて取止めたることなけれど、恨は、長し人魂かなにかしらず、筋を引く光りもの、お寺の山という小高き所より、折ふし飛べるを見し者ありとつたえぬ。

おわり